令和5年度　第3学期　第76号

学校法人みその幼稚園

My view of education
～ 園長のスクラップBOOKより ～

保護者の皆様も、昨今の日本の社会情況、教育現状に対し、それぞれのご意見をお持ちのことと思いますが、まずは、私たちが親として、大人として、そして日本人としてしっかりとした『教育観』を持つことが一番大切な事ではないでしょうか。

ここに紹介するスクラップ記事は、私の教育観で読んで共感できる内容のものです。もし、保護者の皆様と共感できる記事があれば幸いです。お時間があるときに、是非お読み下さい。

母親が変われば子育てが変わり子育てが変われば国が変わる

人財育成の会社を営む古賀敦子さんは、その手で三人の男児を育て上げてきた母親。三人の子を自分が選んだ出産方法で産んだ経験や、ご自身が子育てで実践してきたことを交えて、母と子の関わり方についての想いをお話しいただきました。

古賀敦子

イメージアップアカデミー芦屋代表

こが・あつこ
短大卒業後、大手化粧品会社にて秘書・受付として勤務。退職後、テレビ・ラジオでのキャスターとして活動。結婚、出産後は「お産」に関する全国組織をつくり女性の母性を引き出す取り組みを10年間続ける。その後、ビジネスマナーと一般マナーを学び、企業・病院・大学などでの研修や講義に携わる。平成22年イメージアップアカデミー芦屋を設立。現在はマナーを伝えるとともに「母性を組織に活かす」をモットーにチーム力アップの一助となるよう人財教育トレーナーとして活動中。

自然体を大切にして楽しんだ子育て

私は、三人の息子を育ててきた母親です。三人が幼い頃は子育てに専念していましたが、十五年前からマナー講師として仕事を再開し、その後いまの会社を立ち上げて様々な組織の人財育成のお手伝いをさせていただいています。現在、長男と次男は社会人となり、三男はラグビーU20日本代表選手で、ラグビーと勉強の両立に精を出す大学生です。

男の子ばかりの子育てで「大変でしょう?」と言われることもしばしばでしたが、思いのほか穏やかな男の子たちで、正直なところ反抗期もほとんど感じませんでした。子どもが幼少時代、地元では早期教育やお受験教育も多く見られましたが、私たち夫婦は「人の気持ちが分かる、情緒豊かな人に」という教育方針のもと、いろいろな体験ができるよう家族一緒になるべく外に多く出掛けました。

自然に触れたり、美術館や演奏会にも行き、本物に触れさせることを織り込みながら一緒に楽しみました。特別な躾教育をしたわけではありませんが、そんな中で挨拶をすることを教え、その大切さを自然に身につけていったように思います。ピラミッドを自分の目で見るためにエジプトへ家族一緒に行ったことを思えば、それらは一連の体験教育だったといえるかもしれません。

「三人」という兄弟構成は育児の上では忙しい中にも助かる面もありました。家事は小学二年生くらいから子どもたちにも分担。洗濯やトイレ掃除など、子どものレベルに合った仕事を選んで未熟な完成度は気にせず任せ、それは高校生まで続きました。長い間にはサボる時もありましたが、その時に二人の兄弟がやっていない子を許さないという「二対一」の状況では逆らえず、私が言わなくても兄弟の間で解決してくれたのです。

このお手伝い作業は私が一人だけで頑張らないという自然の流れで起こり、私自身も威圧が苦手なので「命令」ではなく「自主的」に行うことに発展しました。自主性を育てたい、と思っていたことがお手伝いを通して培われた気がします。もちろん、「ありがとう」の言葉は常に私も忘れませんでした。

このように、私はことさらに子育てを頑張ってやってきたつもりはありません。子どもたちと過ごす一日一日をただただ愛おしく、楽しみながら過ごしてきたというのが実感なのです。それができたのはいつも私たちを温かく見守ってくれる夫がいたおかげです。

母は太陽でありたい

子どもたちを大きくしていく中で食事には気をつけるようにしました。特に家族全員で食卓を囲む場面では、会話もおいしさの要素にしたいとわが家なりのルールをつくりました。それは全員でその日にあった楽しかったこと、悲しかったこと、何でもないと思われることでも会話し合うのです。何でも言い合えるゆるやかで温かい雰囲気づくりは母親の役目と考えました。

当然、私自身がイライラしていては食事もおいしくないので、なるべく心に余

裕を持つことを心掛けるようにしました。そのために自分の行動には時間の余裕を持って当たることを私自身の目標として努力しました。そうすると子どもたちの精神も安定するように思います。

母親の役割は太陽であり、子どもたちの前ではいつも笑顔の母でいたい。そんな想いで私は子育てに臨んできました。いまでは三人とも私よりずっと体も大きくなり、父親とはいまも四人で歴史小説本等の回し読みを続けているようですが、私の心はいまも彼らを温かく丸ごと包み込んでいるつもりです。

出産への向かい方でできた子育てへの覚悟

若い頃の私は取り立てて子どもが好きではなく、どちらかというと苦手なほうでした。そんな私でも出産をきっかけに母親としての自覚が生まれたのです。

初めての妊娠が分かってから、夫婦で出産についてかなり勉強し、辿り着いたのが病院の一室を借りての水中出産でした。当時はまだ水中出産は珍しかったのですが、痛みを回避する出産方法を探す中で出した結論でした。出産の痛みはあったもののわが子を水の中、自らの手で取り上げた瞬間、「命」そのものを感じました。その小さな体に宿る小さな命に「この子は絶対に私が守る」という覚悟が芽生えたのもその瞬間でした。

二人目と三人目は入院で上の子に寂しい思いをさせたくないことと、私自身が一番落ち着ける場所で楽な姿勢で産みたいという想いがあり、主治医との連携の中、助産師さんの介助での自宅出産を決意しました。そこには信頼できる助産師さんの存在が大きくあり、毎月の健診でお産のこと・衣食住・運動の説明を受けるごとに理解とお腹の赤ちゃんへの自覚が膨らんでいきました。

出産時にも自らの選択と家族の応援の中で産んだことへの満足感がいっぱいで、傍らで眠るわが子を一層愛おしく思い、そのことが育児へのなめらかな滑り出しとなった気がします。

現在、仕事でしばしば産婦人科を訪れますが、病院では出産直後に母子が別々の部屋に引き離されてしまうのが一般的です。面会時間も限られ、母親は自分がお腹を痛めて産んだわが子とゆっくり向き合うことができにくい環境の中で、母性の目覚めや、母親になる覚悟ができるタイミングを逃してしまいがちなのではないかと危惧しています。これは、出産後一年未満の女性死亡者の原因のトップが自殺だったということとも繋がっているように思うのです。

子育ては偉大な事業と認識する

いまは一億総活躍を推進する政府のもと、女性が社会で活躍することに大きな期待が寄せられています。それはもちろん素晴らしいことですが、一方、女性が家庭で果たす役割の大切さも決して見失ってはならないと思います。

三人の子育てと同時に会社経営に携わってきた経験から思うのは、家庭で子どもを育てることには、社会でどれほど立派な活躍をしても得られない別の達成感や喜びがあるということです。次世代のために一人の子どもを育てる価値の大きさを、もっと社会全体で理解してほしいものです。しかし、実際にはいまの産科医療では女性が母親になる覚悟を定める機会も得にくく、また学校教育にもそうしたカリキュラムが組まれていません。子どもの出産を果たして病院を出た途端に何をどうしたらよいか分からず、巷に溢れる情報に振り回されて途方に暮れるお母さんが後を絶たないのも無理もない気がします。

長い目で見れば、母親がしっかり立って子育てができている国は、繁栄していきます。「子は国の宝」といわれる所以です。私はこれから「親子ともに育み合える幼稚園」をつくり、そして妊娠・出産に臨む方や子育てに悩む人々がともに学び、分かり合う、女性が母になるための環境づくりのお手伝いをしたいと考えています。女性が子どもを産み育てることの意義深さを自覚し、お腹の子を慈しみ愛おしく思える母性を育んで、母親として勇気を持って歩んでいくための道標になる場所の必要性を強く感じるのです。

すべての人は母親から生まれてくるということを思うと、母親の役割を果たすことが何より大きな社会貢献かもしれません。子育てのあり方で国も変わる。二十一世紀は母性の時代といわれて久しいですが、一人ひとりの命が輝き、人を思いやる気持ちや慈しみが溢れる社会のために、女性が本来持っている母性を磨き、生かせる時代になることを真に願っています。

母親の役割は太陽であり、子どもたちの前ではいつも笑顔の母でいたい